

2022年度退職教員

 北尾 宏之 教授 人間研究学域 哲学・倫理学専攻 1996年4月着任	 高橋 秀寿 教授 国際文化学域 ヨーロッパ・イスラーム史専攻 1998年4月着任
 瀧本 和成 教授 日本文学研究学域 日本文学専攻 1996年4月着任	 ウェルズ 恵子 教授 国際コミュニケーション学域 英語圏文化専攻 1992年4月着任
 本郷 真紹 教授 日本史研究学域 日本史学専攻 1996年4月着任	

入会案内(2006年度以前にご卒業の皆様)

文学部校友会は、2007年度、文学部創設80周年を期に設立されました。現在では約17,000名の会員様にご支援いただいております。

文学部校友会は、専攻の卒をこえた学部校友会として、専攻の同窓会とも協力しながら、卒業生の皆様や文学部教職員・退職者が旧交を温めつつ、文学部校友会のなかで、新たなつながりを築いていけるよう、運営に努めております。

入会にあたっては、終身会費として1万円の会費の納入をお願いしております。趣旨をご理解のうえ、ぜひご入会いただき、より幅広い交流と、立命館大学文学部・文学研究科の発展、ならびに、学生・院生の支援にご協力いただきますようお願い申し上げます。

文学部校友会入会手続きについて

2006年度以前にご卒業の方が新規にご入会いただく場合は、文学部校友会事務局までご連絡いただくか、文学部校友会HPの入会申込フォーム(下記URL参照)よりお申込みください。

立命館大学文学部校友会事務局

☎ 075-465-8187(文学部事務室内)
✉ lalumni@st.ritsumeai.ac.jp
🌐 <https://secure.ritsumeai.ac.jp/forms/lalumni/entry/>



原稿募集

文学部校友会報LETTERS(年一回発行)では「校友の『いま』(近況報告)」、「伝言板(同窓会案内)」などの原稿を募集しています。詳しくは文学部校友会事務局までお問い合わせください。

訃報

●名譽教授 **福田 晃** 先生 2022年1月9日ご逝去
<文学部の在職期間:1971年4月~2000年3月>
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

同窓会への支援

下記に該当する同窓会活動に関する経費を補助します。

クラス・ゼミ等同窓会

正課の小集団科目に関する同窓会
※正課外の同窓会においては
常任幹事会が承認した同窓会も対象

専攻・プログラム同窓会

複数年度の卒業生が
参加するもの

補助内容

同窓会開催、案内状送付、会報や記念誌の印刷、同窓会HP作成など、同窓会活動に関わる経費。
★同窓会開催をご検討されている方は、事前に文学部校友会事務局までご相談ください。

申請団体	補助の根拠	補助金支給上限額
クラス・ゼミ同窓会	①事前申請書に担当教員の確認印。教員に確認が取れない場合は文学部校友会事務局へ相談。 ②文学部校友会会員が3名以上参加するもの。	10,000円(実費) ※領収書必須
専攻・プログラム同窓会	①同窓会規約。規約がない場合は事前申請書に専攻主任または教員の確認印。 ②文学部校友会会員が3名以上参加するもの。	100,000円(実費) ※領収書必須

申請方法など、詳細はこちらをご参照ください。

▶同窓会活動補助申請書類・流れ

🌐 <http://www.ritsumeai.ac.jp/lalumni/dousoukai/workflow.html/>



同窓会活動補助費の事前申請がWebでできるようになりました!

▶活動補助費申請フォーム

🌐 <https://secure.ritsumeai.ac.jp/forms/lalumni/dousoukai/>



伝言板

- 地理学・地域観光学同窓会
今年度の懇親会は中止となっております。
- 英米文学同窓会
今年度の英米文学同窓会につきましては後日お知らせします。
- 哲学同窓会
今年度の活動に関しましては、11月6日(日)ホテルオークラ京都で開催される、文学部校友会の懇親会(11:30~14:00)に参加し、その後朱雀キャンパスに移動し、15時より当日参加された哲学の同窓生の方々と懇談を予定しています。

LETTERS

College of Letters



EVENT!
2022年度文学部
校友会懇親会
11月6日開催予定!
くわしくは3ページへ

写真:東側広場(至徳館より撮影)

会長ご挨拶

立命館大学文学部校友会 会長 **池坊 専好**



誰もが予想だにできなかったことが次々と世の中で起き、これまで当たり前と思っていたことがそうではないということ、まざまざと見せつけられているようにも感じます。人はそれによって生じた困難や変化に屈せず、コロナ禍であっても「with コロナ」の言葉のように、いかに生活上の不利益を小さくして共存していくのが問われています。

校友会にとっては、年に一度の総会と懇談会は、校友会活動の最たるものです。しかしながら、文学部校友会の行事も2020年度は中止せざるを得ませんでした。

それでもようやく昨秋には、御寄付によって建てられた平井嘉一郎記念図書館やきれいに改修された清心館をご覧いただくことができました。この図書館は約110万冊の蔵書を誇り、椅子などにも工夫が凝らされ、学びつつ美意識も育まれるような環境です。学部生はもとより、卒業生や近隣の方にもご活用いただけるのもうれしいことです。清心館のイメージも一新され、現代に合った空間が生まれています。

オンライン配信も活用しながら行われた藤健一名誉教授、矢野桂司教授のご講義は、学生時代にタイムスリップしたかのようで、懐かしさと共に改めて校友であることを強く意識されたのではないでしょう

か。日本の状況も教育環境も時代とともに移り変わりますが、それでも変わることはない校友の絆が確かにあり、それはひとりひとりの日々の誇りと力になり、また在校生へのサポートにもつながっていきます。

昨年、スポーツ分野や文学など幅広い世界で文学部の卒業生の活躍をメディアで見ることが増えました。後輩たちのいきいきとした姿は大きな希望です。それぞれの日々の選択と実践がまさに近くの人とはもとより見えない誰かを助け、互いの支え合いでこの社会が成り立っていることを実感します。

コロナ禍、そして地球環境破壊、ウクライナ侵攻に見られる世界平和の秩序の崩壊等、混沌とした状況下で私たちが克服すべき課題は多々あります。先の読めない厳しい時代だからこそ、文学部での出会いと人間的つながりが、変わることはない心の宝であり、校友会が皆さまの心落ち着く場となりますように、役員一同努めてまいります。どうぞ、よろしく願いいたします。

●2012年 文学研究科 人文学専攻博士課程前期課程 日本史学専修修了
●華道家元池坊 次期家元



立命館大学文学部校友会会報 2022年 第14号

2022年7月発行 立命館大学文学部校友会 〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
☎075-465-8187 🌐 <http://www.ritsumeai.ac.jp/lalumni/> Facebook もご覧下さい。

立命館大学
文学部校友会
ホームページ



学部長ご挨拶

立命館大学文学部校友の皆さまには、日頃より学部・研究科へのご支援・ご協力を賜っております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。そして新型コロナウイルスの感染拡大によって影響を受けた皆様にお見舞い申し上げます。

コロナ禍にはいつ3年目を迎えますが、本学では徐々にコロナ前の活気を取りもどそうとしております。昨年秋学期にはほぼ9割を超える授業を対面で行いました。もちろん様々な事情で教室に出席できない学生がいる場合はライブ配信を含む、ハイブリッド型授業を行いました。2022年度春学期になると教室収容定員をコロナ禍前の水準に戻し、ほとんどの授業を対面で行なっています。一方でメディア授業に利便性を感じる学生が増えていることもあって、またこれまでの経験を活かして、一部の授業はオンラインのみでの提供となっています。このように学生の学びのスタイルも変容しています。

キャンパスの風景も変わりました。文学部の基本棟である清心館1階のラーニング・コモンズには毎日多くの学生が集まっていて活気を帯びています。黙々とパソコンに向かっている学生もいれば、時には賑やかにマスク越しに議論を交わし、グループ発表の準備をおこなっている学生もいます。至徳館(旧中川会館)前の東側広場(旧図書館跡)では、暖かい日には多くの学生が芝生に腰をおろし、昼食をとっている風景が展開されています。2021年3月に改修工事が終了した啓明館にある「キャンパス・アジアプログラム」の共同研究室には、本学文学部の、そしてやっと来日できた韓国の東西大学校や

なかがわ ゆうこ
立命館大学文学部長 中川 優子



中国の広東外語外資大学のキャンパス・アジア生がいっしょに学習している姿がみられます。ここ2年間はオンライン留学だったのですが、昨年秋に本学から14名が東西大学校へ渡り、約4ヶ月の留学生生活を終えて帰国し、今年の2月には次の14名が東西大学校に渡りました。人文学の教育の国際化の推進のよき事例として高い評価を受けている、このキャンパス・アジアプログラムは、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」として3期連続採択されています。なお、UBCへの留学を含む、全学の留学プログラムも2022年度にはやっと現地派遣が再開されそうです。

2021年度の卒業式・学位授与式は、春学期には全学部・研究科合同でOICを会場にして、秋学期にはコロナ禍前のように衣笠キャンパスの体育館で、密を避ける形で執り行われました。コロナ禍のみならず、ウクライナ侵攻など、不安要因や制約がいっぱいあるなか、学生たちは卒業論文の作成や就職活動等においてよく頑張ってくれました。2021年度には約900名の新規の校友会会員が誕生したことをたいへん嬉しく思います。

これまでの文学部、文学研究科の発展は、校友の皆さまの支えがなければ決してかなわなかったものです。改めて感謝申し上げますとともに、今後も共に学び、成長する文学部・文学研究科生に対しての変わらぬご支援のほど、よろしく願い申し上げます。

2022年度 文学部校友会 懇親会のご案内

とき 2022年11月6日(日)
11:30~14:00(10:30~受付開始)

会場 ホテルオークラ京都(3F 翠雲の間)、Web配信
〒604-8558 京都市中京区河原町御池 TEL.075-211-5111
地下鉄東西線「京都市役所前駅」直結

企画① 講演会・クロストーク(対談)

🕒 12:00~13:00 (予定)

会場 Web配信

演題
「小説家デビューから
3年経って」
たかせじゅんこ
高瀬隼子氏

クロストーク

たにおる たきもとかずなり
谷 徹 名誉教授・瀧本和成教授



高瀬隼子氏

谷徹名誉教授

瀧本和成教授

高瀬隼子氏

2011年に文学部哲学専攻を卒業後、会社員として勤務しながら執筆した小説『犬のかたちをしているもの』で「第43回すばる文学賞」を受賞、文芸誌『すばる』に掲載されデビュー(単行本は集英社、2020年2月刊)、『水たまりで息をする』(集英社、2021年7月刊)が「第165回芥川賞候補」に選出された。また、近著である『おいしいごはんが食べられますように』(講談社、2022年3月刊)も、「第167回芥川賞候補」に選出され、2年連続のノミネートとなる。

谷徹名誉教授(人間研究学域 哲学・倫理学専攻)

文学部哲学・倫理学専攻に所属し、「現象学」を中心にして、ヨーロッパの現代哲学を専門領域とする。著書『これが現象学だ』(講談社、2002年11月刊)は増刷を重ね、日本の現象学研究をリードしている。現象学を間文化現象学へと発展をさせ、本学に間文化現象学研究センターを創設した。その後10年間、所長としてセンターを世界的な研究拠点へと成長させた。2020年4月にはこれら学内外での顕著な功績が評価され名誉教授の称号が授与された。高瀬隼子氏の在学中の指導教員。

瀧本和成教授(日本文学研究学域 日本文学専攻)

文学部日本文学専攻に所属し、日本近現代文芸(文学・芸術)を専門領域とする。森鷗外を中心に、夏目漱石や芥川龍之介などに代表される明治から大正期にかけての文学者のみならず、大江健三郎や村上春樹といった現代文学まで幅広く研究対象とする文学(史)研究者であり教養人である。文学作品に留まらず漫画やアニメなどのサブカルチャーや映像作品にも深い造詣を有する。近年では教養教育センターの主催するウェビナー講座「SERIES リベラルアーツ:自由生きるための知性とはなにか」でも複数回の講演を務めている。

企画② ミニ講義

🕒 13:10~13:50 (予定)

会場 Web配信

演題
「近代文学と
京都・立命館」

たきもとかずなり
瀧本和成教授
(日本文学研究学域・日本文学専攻)

デジタル会員証の運用開始!

2022年3月より、デジタル会員証を導入いたしました。

NEWS

●ログイン方法

会員証をご提示いただく際は、文学部校友会HPで「会員証」ボタンをクリックするか、ブラウザで下記URLを入力し、ログインしてください。



📄 <https://www.web-dousoukai.com/rits-italumni/>

🔑 ログインID 学生証番号/会員番号 ※1

🔑 パスワード 生年月日(YYYYMMDD形式で入力) ※2

※1 会員番号は本紙郵送時の封筒に記載されている番号です。(Sで始まる番号、または16で始まる番号)

※2 西暦年4桁+月2桁(1月の場合「01」)+日(1日の場合「01」)の8桁



参加対象 文学部校友会員※・文学部卒業生

▶ ※立命館校友と文学部校友は異なりますのでご注意ください。(詳細は会報P.8「入会案内(2006年度以前にご卒業の皆様)」をご覧ください)。

👤 定員 会場定員120名(応募者多数の場合には先着順とさせていただきます。)/Web参加300名

参加費

※Web参加は無料です。

文学部校友会員 1,000円/非会員(入会いただいていない方・同伴の方) 2,000円

▶ 無料招待枠 2017~2021年度卒業生(2017年9月~2022年3月卒)、卒業後10年(2010年9月~2012年3月卒)、卒業後50年(1970[昭和45]年~1972[昭和47]年)の文学部校友会員の方は無料でご招待いたします(※懇親会非開催年度分を避けて無料招待枠を設定しております)。

※懇親会ではお食事(お弁当)をご提供させていただきます。

懇親会に参加をご希望の方は以下のどちらかの方法でお申込み下さい

Web申込

▶ 立命館大学文学部校友会HP▶「イベント」▶「懇親会参加申込」(<https://secure.ritsumeij.ac.jp/forms/italumni/events/>)からお申し込みください。

ハガキ申込

▶ 校友会報「LETTERS(Vol.14)」内の折り込みハガキに必要事項をご記入の上お申し込み下さい(切手不要)。



申込期限

2022年9月30日(金)
〈必着〉

※新型コロナウイルスの感染状況により、懇親会の実施形態が変更になる場合がございます。その場合は文学部校友会のホームページやFacebookでご案内させていただきます。

【お問合せ先】立命館大学文学部校友会事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 TEL:075-465-8187 FAX:075-465-8188
E-Mail: italumni@st.ritsumeij.ac.jp HP: <http://www.ritsumeij.ac.jp/italumni/>

新清心館・啓明館完成記念企画 講演会報告

時：2021年12月5日(日曜日)、所：立命館大学衣笠キャンパスおよび Web

2021年度は、「新清心館・啓明館完成記念企画 講演会」と題して、2020年・2021年にそれぞれリニューアル工事を完了した両館のお披露目企画や、図書館ツアー、そして新しくなった清心館を会場とした特別講演会を実施しました！



新校舎の内覧

参加者に館内マップを渡して自由に内覧を楽しんでもらえるようにしました。参加された校友からは、当時通った校舎と比べて「とても綺麗で立派な施設になった!」という声が聞かれました。また、同館1階には「文学部の今昔スライドショー」という特設展示コーナーも設けました。



図書館ツアー

新校舎の内覧と共に、2016年4月に開館した「平井嘉一郎記念図書館」をめぐる図書館ツアーも開催しました。館内の案内を現役学生にお願いしたことで、現役生とOBOGの貴重な交流の機会にもなりました。



特別講演会

新しく生まれ変わった清心館を会場に、藤健一先生(文学部名誉教授、心理学)と矢野桂司先生(文学部教授、地理学)による特別講演会を実施しました。司会は、河原典史校友会副会長(文学部教授、地域観光学)が務めました。



第1部を担われた藤先生は「清心館物語」と題した講演を行い、広小路時代から2020年の新清心館への変遷を当時の図面や写真、映像などの貴重な史料を用いてご説明下さいました。



第2部を担われた矢野先生は「歴史都市時空間散歩:デジタル人文学の視点から」と題した講演を行い、「重ねる(overlay)」をキーワードに、古写真や古地図と今日の京都の姿を「重ねる」、最先端の「デジタル人文学」の手法をご説明下さいました。



参加者からは、「現役の頃に戻ったようだ」という声や「とても興味深いお話でした」という声が聞かれました。



就農・交流型の棚田オーナー制度における棚田維持の背景 —福知山市毛原を事例として—

文学研究科 行動文化情報学専攻博士課程前期課程 考古学・文化遺産専修 1回生(受賞当時:考古学・文化遺産専攻 4回生)

佐藤 芽生瑠

この度の2021年度文学部ゼミナール大会において、文学部校友会会長賞をいただけたことに感謝申し上げます。

1970年代より、中山間地域において過疎高齢化が深刻化し、農地の耕作放棄が進行しました。そこで、都市住民と地元農家の交流によって棚田を維持していく取り組みである棚田オーナー制度が導入されました。今回は、都市住民と地元農家の階層性や属性に注目して、両者が棚田の維持にどのように関与してきたのか調査を行いました。

大会に参加したことで、様々な意見をいただけた事、発表においてまだまだ未熟な点があったことなど、自分にとって大きな収穫となりました。このような機会を企画していただき、本当に感謝しています。



TOPICS /

彬子女王殿下が文学部の 客員教授に御就任

2022年4月1日付で三笠宮家の彬子女王殿下が文学部客員教授に御就任されました。5月12日には衣笠キャンパスで大学院の授業に御登壇をいただき、「日本文化の継承」をテーマに御講義をいただきました。6月12日の学部の授業では株式会社聖護院八ツ橋総本店さまの御協力のもと、フィールドワークを実施していただきました。また秋学期には立命館大学アート・リサーチセンターで開催されるセミナーで御講演をいただく予定です。なお彬子女王殿下の任期は2023年3月31日までとなっています。



左から矢野教授、河角准教授、彬子女王殿下、中川学部長、本郷教授 ※写真撮影時のみマスクを外していただきました。

大学院で学問を 探究してみませんか?



立命館大学文学研究科では、幅広い年代の方が大学院生として学んでいます。文学部を卒業された皆さん、学部での学びを深める形で、大学院で学問を探究してみませんか?

文学研究科には、高度な知識基盤社会で活躍するために人文学を探究する「高度専門コース」と、研究者を目指す「研究一貫コース」の2コースがあり、皆さんの目的に合わせてコースを選ぶことができます。

11月から「大学院ウィーク」や「大学院進学説明会」などのイベントを開催し、文学研究科の紹介や入試対策、そして文学研究科の教員や現役院生に直接相談できる場などを提供していく予定です。イベントの詳細や申し込み方法などは、10月下旬頃、「立命館大学大学院 入試情報サイト」に掲載する予定です。ぜひご覧ください!

立命館大学
大学院
入試情報サイト



立命館大学
文学研究科
ホームページ



『縄文時代の社会の変遷を明らかにする』

縄文後期の社会が、結果的に稲作を受け入れる下地となった

—先生のご専門は考古学、中でも「縄文時代の社会の変遷」ということですね。

矢野 縄文土器の分布圏の変化が、当時の社会のどのようなことを反映しているのかを研究しています。縄文初期は、同じ手法で作られた土器の広がる範囲が、時代によって広くなったり狭くなったり、変化が大きかったのですが、それが縄文後期になると安定していきました。婚姻などによる人の移動の偏りがなくなり、安定的な社会が形成されていったことを示していると考えられます。

面白いのは、その移動の少ない安定的な社会が、結果的に、その後弥生時代に伝わった稲作を無理なく受け入れる下地になっていたということです。渡来人がもたらした稲作を自分たちのものにし、他の土地にも広げていくネットワークの基盤を、自分たちが気づかない間に準備していた。私はそこにとても興味をおぼえるのです。

美術家とのコラボで「地中再現展示」も

—現在は、どのような発掘調査をしておられるのですか？

矢野 今、学生と一緒に調査しているのは、滋賀県米原市にある縄文時代末期の杉沢遺跡です。扇状地の末端にあり、水が湧くので人が住むには良い土地で、今も遺跡の上に集落があり、縄文時代の暮らしと今が繋がっていることを教えてくれる遺跡です。家があ



美術家とのコラボで行われた「地中再現展示」▲

るため周辺を少しずつしか発掘できないのですが、なんとかして縄文時代の住居跡を見つけるのが今の目標です。

この遺跡の発掘では、美術家とのコラボによる「地中再現展示」も行っています。2017年には、2メートル×4メートルの区画で発掘した土器の破片を、現地の集会所に設けた同じ広さの空間に、地中にあった時と同じ深さ、同じ角度と向きで展示しました。その場で発掘したものをリアルタイムに次々展示していくというプロジェクトで、考古学に興味を持つ人だけでなく、インスタレーション・アートとして鑑賞する方も多く来ていただきました。

このプロジェクトを通して、私たちが暮らす地面の下には過去の堆積物、人間の生活の痕跡が存在しているということを目に見える形で理解していただけたのではないかと思います。私自身にとっても大きな経験でした。遺跡とは、知識を得るための研究材料ではなく過去の遺産そのものであり、そこに存在すること自体に意味があるのだと改めて感じられたからです。

考古学は、今に生きる我々に大切なことを教えてくれる

—考古学の研究を通して先生はどのようなことを感じておられますか？

矢野 最初にお話したように、縄文人は自分たちの社会の向かう方向をコントロールしようという意識はなかったと思います。しかし現代から見ると、縄文人は知らない間に稲作を普及できる安定的な社会の下地を作っていたことになりそうです。それはとても大切なことを教えてくれているように感じます。今に生きる我々は、社会が進む方向を自分たちでコントロールしているつもりですが、実は全くできていない、むしろ違う方向に進んでいることに気づいていないのかもしれない。結果は、後で歴史をひもといて初めてわかることなのではないでしょうか。そんな意識を持てるようになったのが、考古学の研究をして良かったと思う理由の一つです。



水中ロボットを使った葛籠尾崎湖底遺跡の調査▲

PROFILE

京都大学文学研究科考古学専攻博士課程修了。財団法人辰馬考古資料館学芸員、立命館大学准教授を経て2007年より現職。琵琶湖の葛籠尾崎湖底遺跡の調査では、他学部の教員と連携し、水中ロボットを使った湖底の土器画像撮影や位置情報の取得を行っている。趣味はハイキング。よく行くのは神護寺から沢池までのコースや、愛宕山、比叡山など近隣の山。



文学部校友の「いま」



和歌山は惜しいところが多いんです

和歌山市の博物館・文化財関係の部署に37年間勤め、博物館では特別展など展覧会、資料の収集保存、調査研究、教育普及などの活動を行ってきました。教育普及活動の一つ、史跡や文化財を巡る「史跡散歩」では地形の説明をおりまぜて案内してきました。これまで地形の説明は短めに行ってきましたが、プラタモリが始まってからははいねいに説明しても聴いてくれる人が増えました。

37年目の今年、そのプラタモリに案内人として出演させていただきました。表題の言葉は、1月15日の番組収録の時、和歌山城砂の丸の高橋台にて台本のセリフのあとタモリさんが「砂丘をそのまま残しておれば、ラクダの2~3頭飼えたのに…実に惜しい」と繰り返し言われたのに応えた言葉です。それは砂丘だけでなく、あと40日早く戦争が終わってれば、姫路城に次いで国宝に指定された和歌山城や城下町の町並みが焼失しなかったことなど、和歌山では日頃から「惜しい!」と感じることが多く、反射的に出た本音の言葉を番組では採られました。和歌山には歴史や文化財があり自然が豊かなのに、県民・市民がその良さに気づき活していないこと、実に惜しいと常々思っています。番組を見た人からは「和歌山に砂丘があると知らなかった」という感想を多く頂戴しました。これまでの案内の反省すべき点で、今後の巡検や授業では分かりやすい地形の説明を心がけたいと思います。



ぬかた まさひろ
額田 雅裕

関西大学大学院非常勤講師
元和歌山市立博物館館長
1980年卒業

よくばりに「三足のわらじ」!!プロボクサーとして自分を表現しながら、すべて100%で挑む

私の職業は、プロボクサー、高校保健体育科教師(週3日常勤)、スクールカウンセラー(週2日)です。ボクシングを志したのは30歳になってからでした。大学生の時柔道部に所属し、4年生時には全国5位に入賞しました。その後28歳で教壇に立つようになりました。2年後のある日仲の良い同級生がなにげなく放った「もう30やしな」という人生の諦めとも受け取れる言葉に、自分に言われている気がして心の中で反発しました。まだ身体も動かし「やりたいことを始めるのに遅すぎることはない。私がそれを証明する」とテレビで観た井岡一翔選手をきっかけに、ボクシングジムの門を叩き、その後約7年後にWBO世界スーパーフライ級タイトルマッチに挑戦し、チャンピオンになることが出来ました。この経験から「何事においても始めたいと思ったときが、その人にとっての適齢期」と考えるようになりました。私がボクシングと共に生きることを決める上で1番必要だったことは、「覚悟」でした。ずっと夢だった高校現場での仕事をしながらプロボクサーをすることは、犠牲にするものも多いことは分かっていました。私は真面目な反面、とても不器用な性格です。だからこそ少しでも出来ないことを出来るようにしたい、1つ1つ丁寧に経験を重ね成長したい、という想いが強いです。教師・カウンセラーとして生徒たちと接するなかで、多様性を受け入れながら日々成長させてもらっています。最近特に、教師・カウンセラーをしているボクサーだからこそ表現できる自分がある、と信じて日々練習に励んでいます。現在の目標は、海外で試合に出場し再度世界のベルトを巻くことです。



おくだ ともこ
奥田 朋子

天王寺学館高等学校 保健体育科教員
太成学院大学高等学校 スクールカウンセラー
プロボクサー
2006年卒業

現代人は、社会が進む方向を
本当にコントロール
できているのだろうか